

豪雨被災寺院が相互支援で交流

長野市の西敬寺(木賣慈教住職)と熊本県湯前町の明導寺(藤岡教頭住職)は、台風豪雨で被災したお互いを支援しようとして、1年前から交流を続けている。12月にはそれぞれの報恩講法要に地元の名産品を送り合い、参拝者とともにつながりの尊さを分かち合った。

西敬寺は2019年10月の台風19号「令和元年東日本台風」で門徒が被災した。寺から近い長沼地区では千曲川が決壊し、30戸余りが床上・床下浸水。名産・りんごの果樹園も多くが水に浸かった。

木賣住職(48)はボランティアや寺独自で開く連続研修会の参加者らと泥出しや仏壇の搬出の手伝いを行う中、被災を免れたにもかかわらず出荷できないりんごが多くあることを聞き、売り上げの一部が支援金になる「復興支援りんごプロジェクト」を立ち上げ、寺が窓口になって販売を助けてきた。

木賣住職は「対応できる範囲で、販売は本願寺派寺院のみとさせていたのだが、ボランティアで駆けつけてくださった安芸教区の方や各地のお寺から注文をいただき、温か



さを身をもって感じ「いただいたご恩はとも『返せる』ものではないが、その恩を別の誰かに『送る』ことはできる。次にどこかで同じような思いをする方があれば、今度私は私たちが力になりました

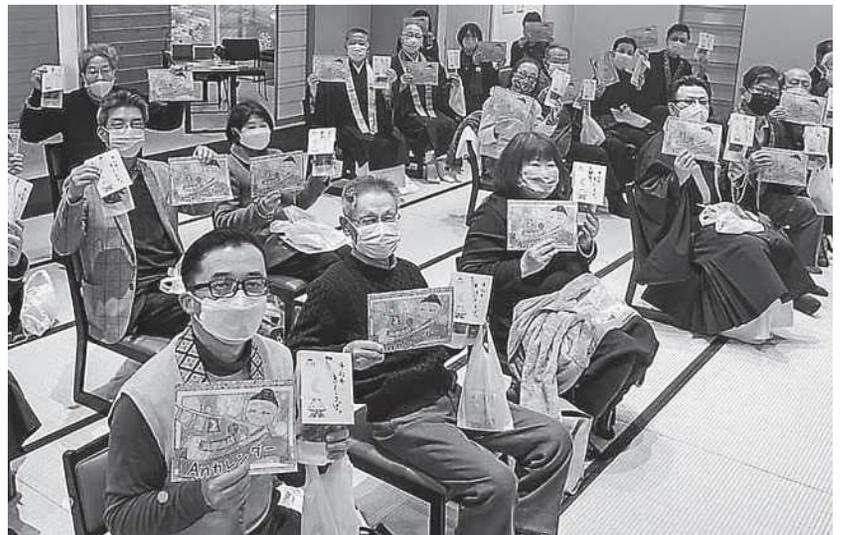
い」。木賣住職がそう考えているところに起きるのが九州地方を襲った20年7月の「令和2年7月豪雨」だった。この豪雨では熊本県の人吉・球磨地方で甚大な被害が発生。人吉市に隣接する湯前町の明導寺・藤岡住職(47)は、発災当日から人吉市や球磨村の被災地域に入り、連日、地元の仲間とともに救援活動に当たってきた。藤岡住職はSNSで現地の様子や必要としている支援について発信。そ

の情報が全国の寺院や、柔道で交流のある母校・龍谷大学の関係者らの目に止まり、「ないものはないほど」の支援物資が明導寺に寄せられた。

木賣住職もそのSNSを見た1人。「復興の求心力になっている藤岡さんの行動に感銘した」という。九州の豪雨から半年たった昨年1月に「復興の中で育ったりんごが人吉・球磨の皆さんの希望の光になれば」と復興支援りんごを送り、交流が始まった。

「面識のない木賣さんから突然りんごが届いて驚いたが、被災した同士助け合いたいという思いが強く、うれしかった」と藤岡住職。その5月には西敬寺の永代経法要に合わせ、熊本の名菓や地元産のゆず胡椒を送った。その後もSNSなどで連絡を取る中、12月の同じ日にそれぞれ自坊の報恩講をつとめることを知った両住職。「お互いの支援になれば」と名産品を送り合うことにした。

法要当日、西敬寺は熊本から届いた名産品の「浄心寺きくらげ」を購入し、被災した人を本堂に供え、参拝者に配った。「おさがり」として配った(写真右)。木賣住職が両寺のつながりを説明すると、「コロナが終わったら、みんなが熊本に」と笑顔が広がったという。また、明導寺では復興支援りんご210kg、真宗本願寺派というネットワークがあってこのつながり。災害が起きてから行動することも大切だが、日頃から自然とできる宗門であれば「声をそろえた。



を本堂に供え、参拝者に配った。長野と熊本、1000kg離れた両寺の住職は法要後、「被災するまで面識はなく、まだ直接お会いしたこともないが、お念仏のご縁でつながっていることを実感している。浄土